

ギリシャ語の人類愛に語源を持つフィランソロピーは利他、慈善、奉仕的な行動や社会貢献活動を包含する言葉だ。公益社団法人・日本フィランソロピー協会理事長の高橋陽子さんは企業や個人の活動を紹介、支援する取り組みを続けてきた。それが生む共感つながりがより良い社会をつくると信じてきたからだ。



1990年にフィランソロピーという言葉を知った時、何か啓示を受けたような気がしました。自分がやりたい活動をしているような

気がしたんです。学生時代から出入りしていた社団法人・国民政治研究会に91年に入り、企業市民室という部署を立ち上げ、活動を始めました。経団連に経常利益などの1%

%以上を社会貢献活動に支出しようという1%クラブができ、企業メセナ協議会が設立された時期でした。何かできるのかを模索し、「今なぜフィランソロピーか」というシンポジウムを開き、企業向けセミナーを始めました。一部の大企業トップから掛け声は出ていましたが、企業の社会貢献活動への関心や理

企業の社会貢献促す ■ 当初は理解広がらず

解はそれほど高くなかった。企業を回しても積極的な姿勢を示すところはほとんどなく「立派な活動ですね。頑張ってください」と言われるだけか、「うちは本業で社会貢献をしています」と強調されるかでした。

そんな時、ある大手企業が会員になってくれました。担当の部長が「無関心な企業が多いなら、うちが余計にやらなきゃ」と言って、頑張ってくれたのです。後で知ったのですが、その方は米国の大学で企業の社会貢献について学んでおられた。行政がまだできない公益活動をするのが、企業など民間の果たすフ

イルアンソロピー活動であるという考えをお持ちでした。

国民政治研究会は94年、日本フィランソロピー協会に名称を変更。事務局長として事業を担った。

もともとは安保闘争があった60年に健全な民主主義を育成する趣旨でジャーナリストらによって設立された不偏不党の団体で、討論会や政策研究会などを開いてきました。時代が変わり、次の方向性を探っていた。フィランソロピーは一人ひとりが担い手になってより良い民主主義社会をつくる営みです。その推進は会の設立趣旨に沿い、発展させることだとして名称変

更を認めてもらいました。

フィランソロピーはまだ耳慣れない言葉でしたが、そのまま使いました。ピタリと当てはまる日本語がなかった。慈善という富者が貧者に施すようなイメージがあるし、奉仕は「奉って仕える」で国や目上の人に私心を捨てて尽くす意味がある。博愛や友愛は精神的な理念にはなっても、行動までは含みません。

企業の社員のボランティア活動や寄付を支援するプログラムを作るほか、担い手を育成するセミナー、先進的な取り組みをたたえる顕彰など多彩な事業をしてきた。

うちは社会貢献活動のコーディネートをする団体。実際に何かをなし遂げるのは取り組んでいる団体や人です。脇役、黒子的存在なので直接的な達成感は得にくいですが、企業とNPOを結びつけた新しいつながりを考えたりするのは面白いですよ。導く世界を知ると視野が広がり、考えが柔軟になる。

この30年で企業の社会貢献活動は盛んになりました。偽善だ、自己満足だと言われることはなくなりました。世界の様々な課題解決を目指す国連の開発目標SDGsは、皆が地球や社会の未来のために行動することを求めています。誰もが地域を創る当事者としての感覚を持つ必要があると思っています。

(編集委員)

堀田昇吾が担当します)



略歴 津田塾大学卒。高校の英語教師、中学や高校でのカウンセラー勤務を経て1991年、日本フィランソロ

ピー協会の前身団体に入り、フィランソロピーの推進を始め。2001年から理事長。岡山県出身、71歳。

日本フィランソロピ一 たかはし ようこ
協会理事長 高橋 陽子さん



両親の出身地、岡山県で生まれ、2歳から高校まで大阪で過ごした。戦後ラバウルから帰還し、大手商社に勤めた父はワンマンな家父長的性格だった。一方、クリスチャンの母は聡明(そつめい)で我慢強い人。高度成長期、大阪・千里ニュータウンで妹と2人、アップミドルの家庭でのびのび育った。

小中は公立校に通い、大阪府立豊中高校では合唱部に所属しました。母の影響で教会に通っていましたが、ボランティアに熱心に取り組んだ体

験はありません。

ただ、母は慈母と言っていて、いくらい思いやりが深い人で、周囲には優しくかった。「人には必ず良い面があるので、良い面を見るようにしなさい」と言っていました。死後、私の小中学校時代の友人から「お母さんに相談して助けてもらった」「苦しい時に励ましてもらった」などと打ち明けてもらって驚きました。

対して父はビジネスの場で鍛えられた現実主義者。子会社の社長を退き、母が亡くなった後、75歳から85歳まで1人で米国に渡って暮らしてい

30歳で教師デビュー ■ 中高でカウンセラー

ました。時々訪ねると、移民の人たちと付き合っていて楽しんでいましたよ。時に奔放で、無鉄砲な選択をする性は癖は父譲りかもしれません。

大学卒業後、就職することなく結婚。2人の子育てをしていたが、病気で休職した教師の代役を頼まれ英語の教師に。その傍ら、上智大学の専門カウンセラー養成課程に通った。

大学は津田塾に進学しました。学生運動真っ盛りの時代でしたが、私はたまたまデモに参加する程度の普通の学生でした。卒業後はジャーナリストになりたいと思いましたが、女性を採用するところはほとんどなく、唯一受けたNHKは見事に不合格でした。在学中に婚約し、卒業後すぐに結婚しました。周囲には

常々、女性も仕事を持つべきだと言っていたので、自他ともにビックリの進路選択でした。20代は2人の子どもを育てて過ぎ、上の子が小学生になった30歳の時、病気で休職した教師の代役を探していた友人から声がかかり、当時の千代田女学園の中学・高校で英語を教え始めました。遅い社会人デビューです。

様々な悩みを抱える生徒がいました。教師とは違った関わり方をしたいと思い、上智大の専門カウンセラー養成課程を受験しました。合格してからは大変でした。仕事を終え一目散に自宅に戻って食事の用意をし、子どもの面倒を見てくれる人が来てから大学に行くのです。数年前、娘にあの時は本当に嫌だったとこぼされましたが、「今更言わ



上智大で養成課程を修了し、専門カウンセラーに認定された

れても」と笑い合いました。

千代田女学園に5年間勤務した後、養成課程の先生だった方に誘われ、横浜市にある関東学院中学校高等学校でカウンセラーになりました。不登校になった生徒の件で母さんと面談していると、仕事優先で子どもの問題から逃げている父親が透けて見える。

企業社会の抱える問題が教育現場に投影されていたと思います。次第に、相談を待って対応するのではなく、こちらから働きかけるような仕事をしたと思うようになり、日本フィランソロピ協会の前身団体に移ったんです。

3年後に事務局長になって以降、会員集めから事業の企画、助成金の申請まであらゆる仕事をこなした。

1990年はバブル崩壊の影響が始めましたが、フィランソロピ元年と言われ、社会貢献に初めて日が当たった年でもあります。セミナーを積極的に企画し、企業会員は少しずつ増えました。今は正会員、賛助会員合わせて122社。会費や寄付、助成金、事業収入で運営をする状況は変わっていません。特定の企業の支えはありませんが、しがらみもないので自由に企画事業などができます。

90年代で忘れられないのは95年の阪神大震災です。被災地に学生ボランティアを送り込み、避難所の運営にも携わりました。東京などでチャリティコンサートを開き、できる限りの支援をしました。



1990年代後半に企業の社会的責任(CSR)という言葉がよく使われるようになった。高橋さんは2001年、日本フィランソロピー協会の理事長に就任。先駆的、模範となる活動をしている企業を顕彰する企業フィランソロピー大賞を03年に創設した。

その頃、自然環境の悪化とともに、企業の不祥事が相次いでいました。企業統治の重要性が指摘され、企業価値を従来の経済だけでなく、環境・社会に配慮しているかも重要な指標としてみるべきだ、

という考えが出てきました。社内にCSRの担当部署を整備する動きが広まりました。

でも、社会貢献活動の意義が社内の他部署や経営層に理解され、企業全体のものになっているとは思えなかった。担当者は一生懸命活動している、一応、担当部署でやってそれなりのカタチを作ればいい、という社内状況が透けて見えて、社会貢献部署盲腸論を唱えたこともありませう。

企業フィランソロピー大賞は01年から準備しました。企業の経営資源を使っているのに、盲腸のように思われるの

本業に沿う貢献重視 ■ 同質社会から外に

はもったいない。それは、本業と関係ないところで社会貢献をしようとしているからだと感じ、大賞の選考基準には当初「本業を生かした活動」という条件を入れました。本業にも資する活動をたたえれば、社会貢献の担当部署だけでなく、営業など他部署の人や経営層も関心を持ってくれると思ったのです。

現在、企業フィランソロピー大賞は、本業、それ以外も含めて、社会課題の解決のために人材や技術などの経営資源を生かした活動をしている企業に贈られる。革新性や継続性、波及性などを有識者の選考委員が審査して決めている。

経営の方向性と合った社会貢献をしているか、経営者が関与しているかどうかは、不

可欠なポイントにしています。贈呈するのは表彰状だけで賞金や賞品はありません。表彰状は文章に授賞の理由を盛り込み、祝意と感謝の思いを込めて丁寧に書いています。贈呈を喜んでいただけるどころからもうれしくありません。

大阪のアプリケーショングループは、元出かせぎ労働者でホームレスになった人たちの生活改善支援を続け、06年度に大賞に選ばれました。交通費もお出ししないのに、贈呈式には社長以下若い社員が大勢来られました。「自分たちの仕事が認められたことで、自信を持てた。親もやっとわかってくれた」と大変喜んでいただいたのが印象に残っています。

19年度に大賞を受賞した若

手県のカス製造販売会社の北良は、建設したソーラー発電で得られた収益で、災害時に医療装置稼働などの支援ができる人材の育成と機器の開発をしています。東日本震災時に自分たちは十分な役割を果たせたかと自問し、そうした活動を始めたとうかがいました。顕彰でこうした企業の存在を多くの人に知っていただけなら、と思っています。

企業の社会貢献活動支援では、従業員からの寄付先となる団体選びやボランティア活動の仲介などをするマッチングプログラムも実施している。

私たちの主な役割は企業とNPOの橋渡しや、社会貢献活動がより有効にできるようにコーディネートすることです。「蛸壺(たこつぼ)から出ましよう」と言っているのですが、これは、同質社会から出ることで、違う価値観や発想に触れてもらい、既成概念から解放されたい、ということの意味なのです。

社員がボランティアで福祉施設や環境保護の手伝いをするなどで、それまで知らなかった世界や自分とは違う常識などに接すると、新しい発想が生まれ視野が広がるんじゃないでしょうか。

現場に行く課題が見えてきます。課題を見つめる力もつく。異質なものに触れて豊かになった想像力で、課題の解決策を考える。社員の成長にもつながる、そんな活動を増やしていきたいですね。



企業の従業員が寄付しているNPOに、報告会を開いてもらうことも(マイクを手にしてるのが高橋さん)

1992年に創刊した機関誌「フィランソロピー」の編集は、社会貢献支援の企画や人脈づくりにも役立った。障がい者の支援は、走りながら方向性を模索していた初期の出会いから始まった。

10年くらい、機関誌の中身の半分以上は私が取材して書いていました。新聞や雑誌に登場し、社会貢献に関係しそうな団体や企業、人に連絡を取り、会って話をおろかがないのです。何のつてもないので、祈るような気持ちで手紙に趣旨を書いてお願いする

人間
発見

しかありませんでした。

そんな中で障がい者やその支援者の方々と出会いました。特に心を引かれたのが、個人的な知的障がい者とその創作活動です。滋賀県の信楽で、寮に住みながら製陶所で働く障がい者の映画を製作した方と知り合い、新たな映画を作れないかという話になりました。

製作委員会を立ち上げ、日本財団の助成を受けてできたのが「まひるのほし」というドキュメンタリー映画です。信楽のほか、兵庫県西宮市や神奈川県平塚市でアートを制

障がい者の創作支援 ■ 農福連携に目向ける

作している知的障がい者を長期間追った作品で、見た人は笑い、そして心を打たれます。

その後、障がい者施設の製品のオンラインショップを運営したり、アート展を開いたりしました。機関誌の表紙は障がい者の描いた絵をずっと使っており、それらを用いた名刺製作もしています。

社会の課題解決に主体的に取り組む若者を育てる事業や、子どもの貧困を考える研修も実施してきた。

子どもたちが社会課題を知り、自分たちで解決したい課題を選び、募金やボランティア活動をする教育プログラムも企画しました。東日本大震災の復興を応援するチャリティリレーマラソンは2011年、東北の被災地の生徒が神戸を訪れて始まりました。

その後、神戸、東京、東北の中学生が走って一緒に募金するようになり、16年の熊本地震の後は熊本県の生徒も加わって18年まで活動しました。

その中で学んだことがあります。子どもは、誰かのためになると思うと、工夫を重ね真剣に努力するということ。一方、虐待や貧困などの厳しい状況から立ち直る子どもとそうでない子の違いは、親身に考えて子どもを育てる大人が近くにいるかどうかだと。

普通は親がそういう存在ですが、周囲にそういう大人がいない子どももいる。そんな子たちに寄り添い伴走してくれる人を増やしたいと、企業の従業員向けに勉強会などを設けました。子ども食堂などで体験してもらうと、心を

動かされる人も多いです。近年は、様々な困難を抱えた人たちの支援へと活動の幅を広げている。

福島県郡山市から委託を受け、19年度から障がい者や引きこもりの人などに農作業をしてみよう事業をしています。農家などと福祉団体が協力して、就労弱者といわれる人たちが働ける場をつくる農福連携事業です。

土を耕し作物を育てることは、急ぐことも簡略化もできない。自然と対話し、恵みを感じたく仕事です。そんなリズムが、就労が難しい人たちには合っているような気がしています。作物を買っ人、直販する人、加工品を作る人など地域の人たちとの関わりも生まれる。農福連携で元気で優しい地域づくりが実現できたらいいし、農業は持続可能な社会づくりで重要な産業になってほしいと思います。

今、神奈川県横須賀市にある久里浜少年院の入所者にコチョウランを育ててもらっています。洋ラン栽培の企業にご協力いただき、少年たちに水をやって花を咲かせてもらい、施設などに寄贈するのです。

彼らは何かをして人に感謝された経験がほとんどありません。院から何かボランティアをさせたいと依頼され考えたりしますが、植物を育て、それを受け取った人に喜ばれる。命の大切さと、人とつながる喜びを知るきっかけになればいいと思っています。



機関誌について熱っぽく語る。表紙には障がい者アートを採用（本棚に陳列）

個人の寄付を広げたいと

1998年、社会のために寄付をした人を顕彰するまちかどのフィランソロピスト賞を創設し、20年続けた。

第1回の受賞者は私財で公益信託の基金を創った東京の経営者でした。老舗の呉服問屋の長男でしたが、関東大震災に遭い、奉公に出て苦労された。取引先の勧めで購入した竹やぶの土地が何十倍にもなって売れた際、「不労所得は社会のために生かすべきだ」と考えたそうです。戦前に法律が制定されながら、活用されてこなかった公益信託

人間発見

活用の第一号でした。

第10回の大賞に選ばれたカレハウスC.O.C。壹番屋創業者の宗次徳二さんも「上場益は社会からの預かりもの」という考えから、私財で名古屋市の音楽ホールを建設された。極貧の少年時代、初めて聞いたクラシックの音色が後の音楽支援の原点とか。宗次さんは他分野の団体の支援にも目配りをされており、その姿勢には頭が下がります。

資産家だけでなく、卵焼き屋を営み、利益の一部を長年寄付してきた人など、多種多様な方々に出会いました。皆

誕生日寄付始める ■ 小さな、未来への投資

さん、どこか無邪気という共通項がありました。

ポイント寄付やクラウドファンディングなど寄付の手法は多様化してきた。しかし、寄付に対するねじれのような意識は社会にまだ残っている。

ご家族の反対や、周囲の目を気にして受賞を辞退なさる方もいました。妬みやたかりなどを心配されるのです。寄付をして傷つく社会は情けない、と思いました。

大人たちのそうした現実に対し、子どもたちのすがすがしい寄付活動が目につきました。子どもたちも顕彰することで大人への刺激にしたいと思い、2005年に青少年への賞も創設しました。子どもたちに、カッコいい大人の寄付を見てほしいという思いも

ありました。

社会貢献活動をするNPOなどが増えてきましたが、どこも資金不足に悩んでいます。ビジネスの手法で課題の解決を、という頼もしい動きも出てきました。ただ、ビジネスでは解決できない課題も多々あります。むしろ、寄付が、社会的なビジネスへの呼び水になることもあります。

一人ひとりの小さな寄付は、未来への投資です。意志と願いをもってする寄付は、民主主義社会の健全さを表すバロメーターだと思います。

まちかどのフィランソロピスト賞が20回で終了した後、新たに打ち出したのが、誕生日寄付の呼びかけだ。第20回で特別賞を受賞されたJリーグ初代チェアマンの川淵三郎さんは、ずっとご自

身の誕生日に寄付をされています。

「スポーツを地域全体で支えていくには寄付文化を育てなくてはいけない、それには自ら実践しなければ」と思ったそうです。検事から福祉の世界に転身された堀田力さんが設立した財団に、毎年寄付を続けてこられました。

「どれほどの額を寄付すればいいでしょうか」と尋ねる川淵さんに、堀田さんは「ちょっと痛いと思うぐらいの額がいいですね」と答えたそうです。粋でカッコいいなと思いました。個人の寄付を広げるにはうってつけと思い、川淵さんに「この誕生日寄付のアイデア、使わせてください」とお願いしたんです。

19年に誕生日寄付のプラットフォームをつくり、「1年に1度、誕生日に寄付をしませんか」と呼びかけを始めました。寄付先は、いのちに感謝し、いのちをつなぐという意味を込めて、困難を抱えている子どもたちを支援する団体を選んでいきます。

「この年になって誕生日がうれしい日になった」と言うってくださる方や、お子さんの誕生日に寄付をされる方もいます。創立記念日に寄付をする企業もあります。自らの健康や子どもの成長、あるいは企業の発展に感謝し、それを寄付という形で次に託す。世代や属性を超えた人間としての共感をつなげていけたら、と思います。

(編集委員)

堀田昇吾が担当しました



まちかどのフィランソロピスト賞は20回まで続けた(最後列左から4人目が高橋さん)